

デジタル時代の初版本

今橋 映子

——岩村透『巴里之美術学生』をめぐって

人文系の研究をする者にとっても、近年国内外で急速に進んでいる公開デジタル・アーカイブの潮流は多くの恵みをもたらしている。とりわけ（著作権の切れた）英語の図書、雑誌テキストのデジタル化はさまざまな勢いで、それに検索機能を併せ駆使できれば、研究上「伝家の宝刀」のような様相すら呈する。

日本近代文学に限定すれば、周知のように、国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」（明治以降の刊行物のデジタル化事業）はやはり有難い。利用者にとつての探索・入手の手間や費用が省かれるだけでなく、当の資料の保存という文化的観点からみても、極めて有益だろう。日本近代美術の領域では、東京文化財研究所が、明治の水彩雑誌『みづゑ』（創刊号／第一〇号）の全冊デジタル公開を試行しているが、これもまた実に貴重である。同様に、多くの貴重図書や雑誌を有する日本近代文学館が、いつの日かこうした事業を開始してくればと夢想するのは、研究者の勝手な言い分だろうか。

とはいえ、この数年来、明治大正期の美術批評家・岩村透（一八七〇—一九一七）の研究をすすめている中で実感したのは、デジタル資料の意外な盲点である。

岩村透は東京美術学校初代の西洋美術史教授であり、雑誌『美術新報』を中心に活躍した美術批評家として、草分け的存在である。当時は黒田清輝・久米桂一郎と並ぶ美校の「三羽鳥」と称されたが、糖尿病で早世したことも相まって、現在では一般に殆ど知られていない。

しかし彼の第一著作『巴里之美術学生』（一九〇三年）は、木下幸太郎世代のまだパリを見ぬ「アマトウル青年に清新な感情を与えた」と言われ、当時のベストセラーであった。貧しいながらも芸術に精進するボヘミアン画学生たちと、その画塾生活を活写する同書は、日本人画家たちがパリへと憧れる最初の火付け役となったのだった。

私自身は二十年ほど前に、この愉快的書物の挿絵が、アメリカ人によるパリ案内小説からの転用である事実を突き止めた（拙著『異都憧憬 日本人のパリ』一九九三年）こともあり、思い出深い本なのだが、実は近年

に至るまでその初版本を実際に手に取る機会に、全く恵まれなかったのである。

芋洗生「巴里之美術学生」は最初、日刊紙『二六新報』（一九〇一年三月～五月）に連載され、一九〇三年一月に『巴里之美術学生、外二芸術談二』として画報社から刊行された。現在では、岩村著作の選文集（宮川寅雄編『芸苑雜稿他』、東洋文庫、平凡社、一九七一年）に再録され、専らこのテキストで広く読まれている。

ところでこの本の初版本、刊行後百年をすぎて古書市場に全くと言つて良い程出ない稀覯本なのである。その上、不思議なことに公的図書館で蔵する館も殆どなく、管見では国会図書館と東京藝術大学図書館の二館に限られる。藝大ではコピー製本で提供されており、それゆえ国会図書館の「デジタルライブラリー」での公開は、画期的であった。

しかしなぜ明治のベストセラーが、これほど残っていないのだろうか。しかも当時の同書広告には、「装釘美麗にして美術界歳末年始の贈物に適当なり」（『美術新報』一九〇二年二月二〇日）と謳われているのである。国会本も藝大本も全頁モノクロであり、これは又奇妙なことではないか——そうこう思っている歳月を経て、ついに辿り着いたのが、野田宇太郎旧蔵初版本の存在であった。野田宇太郎（一九〇九—一九八四）は詩人、編集者、在野の研究者という様々な側面を持っていた。中でも『日本耽美派の誕生』（一九七五年）で〈パンの会〉の時代を詳述し、生前の木下李太郎、蒲原有明などに私淑するうちに、彼らが度々言及する岩村透という存在に、深い興味を覚えるようになった。野田は森鷗外の旧居・観潮楼の戦時完全焼失（一九四五年）を痛恨事と受け止め、鷗外記念館の設立にも奔走し、鷗外と岩村との浅からぬ縁も、早くから推測し得ていた。

野田宇太郎が、『巴里之美術学生』の初版原本をようやく入手し得たのは一九七一年頃。すでに岩村透五十年忌（一九六六年）も過ぎた後である。彼がある古書店の目録に発見した時には、すでに売却済であった所、その購入者が野田の熱意を知って、何と譲ってくれたのだと言う。

現在、野田宇太郎文学資料館（福岡県小郡市）に蔵される同書は、野田自身によってわざわざ秩（ちゆう）に包（くる）まれた形で保存されており、亡き岩村への敬意と愛情が何よりもあらわれている。同書は、縦一八・一cm、横一〇・五cm、全一四一頁ほどの、きわめて薄い「小冊子」で、実際に手に取ればこれが百年後にほとんど遺存しないのも無理はないと判る。

しかも野田旧蔵本には、帆船の図とフランス王家紋章が茶の地色上に組み合わされた、確かに贈り物にも向きそうな洒落た「表紙」が付いていたのである。藝大のコピー本でも、国会のデジタル本でもおそらくそれがちぎれ、中表紙から始まる形になってしまっている。地上におそらくただ一冊かもしれないこの完本を前にして、私は「実物」の計り知れない価値を、再びかみしめたのである。